
遠い君と恋の唄。

衣恋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遠い君と恋の唄。

【Nコード】

N8039P

【作者名】

衣恋

【あらすじ】

江戸時代を生きた2人の、儚く淡い恋のお話。

出会いの季節。(前書き)

江戸時代を生きた二人の、儚く淡い恋のお話。

出会いの季節。

遠い遠い昔。

そう、あれはずっとずっと前の出来事。

もう顔も思い出せないけれど、若い儂はある人と恋に落ちた。

どんな名前だったか、たしか・・・、凜。

そんな名前だった気がするな。

彼女は美しい人じゃった。

江戸一番、いや日本一といってもいいほどのべっぴんさんでな。

それはそれは男子にもてていたものよ。

だがな、彼女は頑なに男子からの誘いを断り続けたんじゃ。

一回だけ教えてくれたんだが、なんでも幼少に父親から暴力を受けていたらしくての。

男子にはどうしても恐怖を覚えたらしい。

そんな彼女がな、たった一りだけ・・・、儂にだけは微笑んでくれたんじゃ。

優しい、優しい笑顔じゃった。

まるで、世界中の男子を虜にしてしまいそうなほどの笑顔じゃった。

・・・儂ももう長くはない。

・・・よいよい、もう自分で分かっていることじゃ。

最期に、お前に話しておきたいんじゃ。聞いてくれるか？

ありがとう。

江戸。

様々な花の彩りが町を埋め尽くすころ、一人の少女と少年が出会う。それは運命よりも強く、約束よりも儚い出会いだった。

「いらっしゃい！」

町の一角に位置する小さな団子屋。

赤い布のひかれた椅子に小さく座るその少女の周りには、大きな人だかりができていた。

「おう！凜ちゃん、今日は俺と遊びに行こうぜ。」

「何を言うか、民の分際で・・・凜さん、本日は私と美味しい茶でもいかがですか？」

様々な男からの誘いの声が飛び交う中、当の少女は俯き加減に小さく声を出す。

「あの・・・、すみません、私今日はちょっと用が・・・。」

「いいからいいから！ほら、行こうぜ！」

ぐっと少女の細い腕が捕まれたとき、ひととき大きな声が人だかりの向こうから飛ぶ。

「おい！引き際を心得ろ！嫌がってるのが分からのか！」

その声に、人だかりがざわざわと道を開ける。

そこに立っていたのは、金色に青目、派手な黄色の着物を身につけた少年だった。

「余所もんがなんの用でえ。ひっこんでやがれ！」

人々が罵声を浴びせる中、少年はニヤリと笑う。

と、次の瞬間、少女の腕を掴んでいた男が、臍を抱え、顔を歪ませて地面へと転がった。

「余所もんが何だって？」

いつの間にか男の前に立っていた少年は、見事に男の臍に命中した下駄をはき直しながら、誇らしげな笑顔で言った。

「っふん、余所もんは乱暴だからいけねえや。」

涙目になりながらも、強がりながらそう言う男は、仲間の肩を借りて、人混みへと消えていった。

それを見ていた周りの人々も1人、2人といなくなり、団子屋には少女と少年だけが残った。

「あの・・・、助けてくださって、ありがとうございました。」

少女は少年に丁寧な礼を言うと、その場を立ち去ろうとした。

が、その少女の手を少年が掴む。

「ちよっと待ちな、お嬢さん。・・・うん、確かにべっぴんさんだなあ。どうだい、俺と団子でも食わんか？」

「え、あの・・・」

「まあまあ、ちよっとくらいいいじゃねえか！」

少年は少女を椅子に座らせると、店の奥に声を掛ける。

「おい！団子と茶、2つくれ！」

強引に少女を茶に誘った少年に、少女は少々戸惑っていたが、いつしか少女は微笑みを浮かべていた。

「お嬢さん、笑うと本当に可愛いなあ。いつもその笑顔でいればいい。」

口にくくつも団子を入れながらもごもごと話す少年に、少女はぷつと吹き出した。

「楽しい方ですね。・・・私、男性とこんなに楽しくお話したのは初めてかもしれません。」

それを聞くと、少年はにっと無邪気な笑顔を向けた。

「俺もじゃ！余所もんじゃ言うて、みな相手にしてくれんから、話し相手がいなくてな。なあお嬢さん、良かったら俺の話し相手になってくれんか？代わりに、お嬢さんが困っている時は、絶対俺が助けてやる！」

驚いた表情だった少女は、しだいに頬をゆるませていく。

「私なんかでよろしいのなら、いつでもお相手させていただきます。」

少年はよし！と笑うと、少し冷めてきた緑茶をぐつと飲み、大きく息を吐いた。

「お嬢さん、優しいな。俺のことを余所もんとして扱わんでくれるし、見ず知らずの奴の頼みも聞いてくれる。・・・みんながみんな、お嬢さんみたいな優しいやつじゃたら・・・。」

少年は言葉をとぎらせると、哀しい目で遠くを見つめる。
その拳が硬く握られているのを、少女は見逃さなかった。

「・・・あなたは、私の幼馴染みによく似ています。だからこんなに落ち着くのでしょうか。彼も、あなたのように楽しくて、優しくて、・・・そして、強い人でした。」

少女は瞳を閉じると、ゆっくりと話し始めた。

少年も、静かに少女の話に耳を傾ける。

「・・・私の母は、私を生んでからすぐに亡くなりました。それから私は父と2人、ひっそりと暮らしていたのですが、私が成長すると共に、父は「お前を生んだせいであいつは死んだ。」と言って暴力をふるってきたのです。・・・その時の傷が、まだ・・・。」

少女は着物の袖を少し上げる。

白い肌には、痛々しい傷跡が幾つも刻まれていた。

少女は自嘲的に笑うと、話を続ける。

「そんな私を救ってくれたのが、あなたによく似た、私の幼馴染みでした。彼は私が父から暴力を受けているところを見ると、泣きながら父を殴って、もう2度と私と関わらないと約束させてくれました。・・・その後、父と別れ、この江戸に来てすぐ、父が自ら命を絶った、という手紙が来ました。」

少年は変わらず遠くを見つめていた。

少女は真っ青な空を見上げる。

「・・・それから、いいえ、ずっと前から、私は幼馴染み以外の男性を見ると、怖くて仕方がないのです。・・・でも、あなたは、あなたは違いました。彼と似ているからかもしれませんが、あなたといると、凄く落ち着くのです。」

少女が話し終えると、少年がぽつりと言った。

「・・・今、その幼馴染みは・・・？」

少女は、寂しそうに笑う。

「・・・亡くなりました。末期の結核で・・・。」

「・・・そうか。」

無言の空気が少女と少年を包む。

賑やかな江戸の町が、2人には何故か遠い世界のように見えた。

沈黙を破ったのは、・・・少女。

「・・・初めてこんな話をしました。胸が軽くなった気がします。・
・・ありがとうございます。・・・あの、よろしかったら、また
明日、ここで会いませんか？」

少年は笑った。

「ああ、待ってる。」

少女は少年にお礼を言っていると、町にとけていった。

一人取り残された少年は、冷め切った緑茶を一気に煽った。

「・・・冷たい。」

そんな少年の呟きは、誰の耳にも届かずに、静かに空気となっていた。

出会いの季節。(後書き)

あと何話が続く予定です^^*

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8039p/>

遠い君と恋の唄。

2011年1月4日04時00分発行